編集後記

何となく世の中が涼しくなってきたので，冬服を着て河上徹太郎の「有愁日記」と東独の何とかいう男の「マルクスの人間疎外論」を読んだ．'何となく'と書いたが，私には此頃時間の観念が甚々希薄である．だから週刊雑誌や月刊雑誌というものは，全く読む気がしない．天文月報も読まないのだが，これは編集している間に内容が判ってしまうので，誤字を探す程度に終る．しかしながら，月報を一旦通読するならば，野尻抱影氏の名筆が時の移り行く勢いを強く印象づけるであろう．90才のご高齢をおして1年間ご執筆下さった氏には，感謝のしようもない．12号をもって氏の星座巡りが終った後には，比較の対象とされないような，泥臭い写真のシリーズをやることになった．テスト写真やモニター写真を12枚集める予定である．シリーズ記事で以前好評だった「星座星表めぐり」は前編集部の努力で一冊にまとめられる．「理科年表による天文数値シリーズ」は，数表を作製する人々の立場から利用する方々への注解であるが，天文の部が完結するまでには，まだ多少の日月を要する．×月○日，編集部で書評が書評になっていないという議論があった．天文月報にふさわしい書評とは何か．どんな書物をとり上げればよいのか．大変に難しい．解説記事が難かし過ぎるという意見もある．しかしこれも，書いて下さる方々のご苦労を察すると，注文がましいことを言う気になれない．宮本正太郎氏の火星の話は，ご多忙のところを心よくお引き受け下さった．また散々無理を申し上げた林忠四郎氏の太陽系の起源の話は，来年の1月号に予定している．解説記事を依頼しても，研究に手をとられていて，引き受けられないと返事する人もいる．是非その研究成果を読者に紹介してほしいと思うような人々の中にかぎって，そういう人がいる．編集係になると，やはり毎号を良いものにしたいと願うが，それだけを押し通すのもどうかと思う．組織の中の歯車となって機能を課せられると，その機能を益々重要化し発達させようとするのは，近代人の盲目的悪癖の一つである．これは自戒であって，校正がルーズなことの言い訳にはならない．原稿の依頼だの広告取りだの，割付だの校正だのと苦労してみると，何期も続けた編集部があったことは，私には奇蹟のように思えてくる．幸いにもKs氏，Nr氏，Nk氏のようなベテラン経験者に正論を吐くSi氏が加わって，面白い編集部となっている．それでもパートタイマーのIt氏がいなかったならば，エンジンのない船の如き醜態を呈しかねない．読者諸賢のご明察を乞う次第である．（編集部，Kd生）

雑　報

新星二題

Nova Oph. 1976：大分県日田市の桑野善之氏は，4箇目の新星を写真原板上より次の位置に発見した．

1976年	U.T.	α (1950.0)	δ	m_{pv}
9月	23.55347日	$18^h00^m.9$	$+11°48'$	8.8

Nova Vul. 1976：英国のG.E.D. Alcockは，次の位置に新星を発見した．

1976年	U.T.	α (1950.0)	δ	m_v
10月	21.764日	$19^h27^m.1$	$+20°21'$	6.5

（香西洋樹）

◇12月の天文暦◇

日	時	記事	
4	3	月	最遠
6	2	海王星	合
7	3	**望**	
	9	大雪	（太陽黄経 255°）
14	19	**下弦**	
19	21	月	最近
20	19	水星	東方最大離角
21	11	**朔**	
22	3	冬至	（太陽黄経 270°）
28	7	水星	留
	16	**上弦**	
31	18	月	最遠

1976年9月の太陽黒点（g, f）（東京天文台）

1	2,	8	6	2,	3	11	1,	28	16	1,	1	21	0,	0	26	2,	4
2	2,	11	7	2,	3	12	—,	—	17	1,	6	22	—,	—	27	—,	—
3	1,	3	8	1,	2	13	—,	—	18	1,	6	23	0,	0	28	—,	—
4	—,	—	9	—,	—	14	1,	7	19	2,	3	24	1,	2	29	2,	4
5	2,	8	10	2,	15	15	1,	4	20	—,	—	25	1,	4	30	2,	6

（相対数月平均値：14.0）

昭和51年11月20日　発行人　〒181 東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
印刷発行　印刷所　〒112 東京都文京区水道2-7-5　啓文堂松本印刷
定価 300 円　発行所　〒181 東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359　振替口座 東京 6-13595